

IV 調査のまとめ

1. 安倍館遺跡の年代と性格

(1) 城館の構造

縄 張 安倍館遺跡は北上川に臨む台地縁辺部に立地する、大形の戦国期城館である。川沿いに北から勾當館・外館・北館・本丸・中館・南館の6郭が並び、外館西側から南館南側まで、幅の広い帯曲輪が取り巻くプランである。帯曲輪は絵図などにも名称の記載がないが、便宜上の名称として使用する。それぞれの曲輪は堀で区画されるが、確実に土塁が存在するのは中央の本丸のみである。本丸の土塁は現在北辺に断続的に痕跡を残すほか、かつて西辺にも存在したことが、地元の人々の記憶に残っている。曲輪の地形は、現況では外館以南の5郭の輪郭はたどれるが、勾當館と帯曲輪の範囲については、住宅建設等で不明瞭となり、一部をのぞいて判別できない状況である。そこで、現況で残る地形と地籍図（第54図）、それに寛文8年の奥州之内岩手郡栗谷川古城図（第57図）の記載内容をもとに、縄張りを復元したプランが第38図である。

この城館は最も土地の高い部分に外館（標高146m）があり、次の北館から南館に向けて1m前後の高低差で順次低くなっている。外館以南の5郭はおしなべて郭内の削平が行き届いており、築城にあたってはかなり入念な造成がおこなわれたものと考えられる。郭内の地形は南館の東端部分が一段低く造成されるほかは、他の4郭の内部はそれぞれ同一平坦面に造られている。北側の勾當館は外館よりも1m～1.5m低く、しかも東側の北上川へむけて緩く傾斜している。また帯曲輪は外館から南館にいたる5郭よりも低く、外方へ緩く傾斜し、勾當館と堀を隔てる北端は、勾當館と同一レベルで対峙する。この曲輪相互の高低差と、平面位置の関係から、外館から南館に至る5郭が中枢的曲輪であり、勾當館と帯曲輪が外郭的曲輪と推察される。

地籍図（第54図）で検討すると、南館西側より中館・本丸・北館・外館を通過し、勾當館東側を下る道路が存在したことがわかる。この道路は現況では外館の北端部付近にしか認められないが、実際の発掘調査においては、中館の南の堀から郭内に上がる箇所が、第5次調査のSD 602堀として調査されたほか、北館の水道・下水管付設に伴う調査でも溝状の通路跡が確認されている。中館・本丸・北館・外館では、曲輪は矩形のプランをなしているのにもかかわらず、道路は斜めに通過している。そして本丸・中館では、曲輪プランよりもこの道路方向に規制された字境が認められ、曲輪内部の当時の建物や柱列、竪穴建物までもが、道路に方向を規制されている。この事実から、この道路は城館当時から存在した道であり、城内の主要通路として機能していたことがわかる。曲輪のプランとは一見無関係なような道路の方向と、それに規制された郭内の遺構群は、道路が築城以前から存在した可能性をも示唆する。この道路に伴う虎口のうち、本丸においては南側の堀から登る箇所の虎口は、現在コンクリート擁壁で変形しているが、北側の堀に面した虎口は、左右の土塁の壁が喰違いになっており、当時の虎口の

形状を良好に残している。本丸の南北の堀をわたる箇所は、現在でも低い土橋状になっている。

堀は本丸の堀が最も大きく、現状でも幅 15 m～22 m 深さは西辺で 2～3 m、北辺・南辺の深いところで 10 m 内外である。本丸堀の調査は過去に 12 次調査において、西辺中央部の下水マンホール部分で、新旧 2 時期の堀の底部を確認している。古い時期の堀は本丸側から約 4 m 深い薬研堀、新期の堀は本丸から約 3 m 深い箱堀であった。帯曲輪の側から計測すればこれより 1 m～1.5 m 浅くなる。本丸の堀は戦後間もないころまで、土橋より西側部分が水が湛えられていたと伝えられており、現在でも北西部ではその名残がある。堀は本丸から外側に向かうにつれ規模を減じており、今のところ重複が認められたのは本丸の堀のみである。南館の堀は幅約 8 m、深さ 2.4 m の薬研堀で、南館の面からの深さは約 3.5 m 内外である。帯曲輪南端の堀は 12 次調査で確認されており、幅 3.1 m 深さ 2.2 m の薬研堀である。この堀は中ほどのところまで一気に埋戻され、その上面は踏み固められていた。寛文 8 年の栗谷川古城図では、この堀は「盛岡より鹿角への街道」になっている。

（２）検出遺構・遺物からみた曲輪の性格

安倍館遺跡ではこれまでに 75 次に及ぶ発掘調査を実施しているが、個人住宅改築に伴う発掘調査がほとんどであり、掘立柱建物跡などは、建物の全体像を把握できないものがほとんどである。曲輪のなかで、最も遺構の重複が認められるのは本丸である。

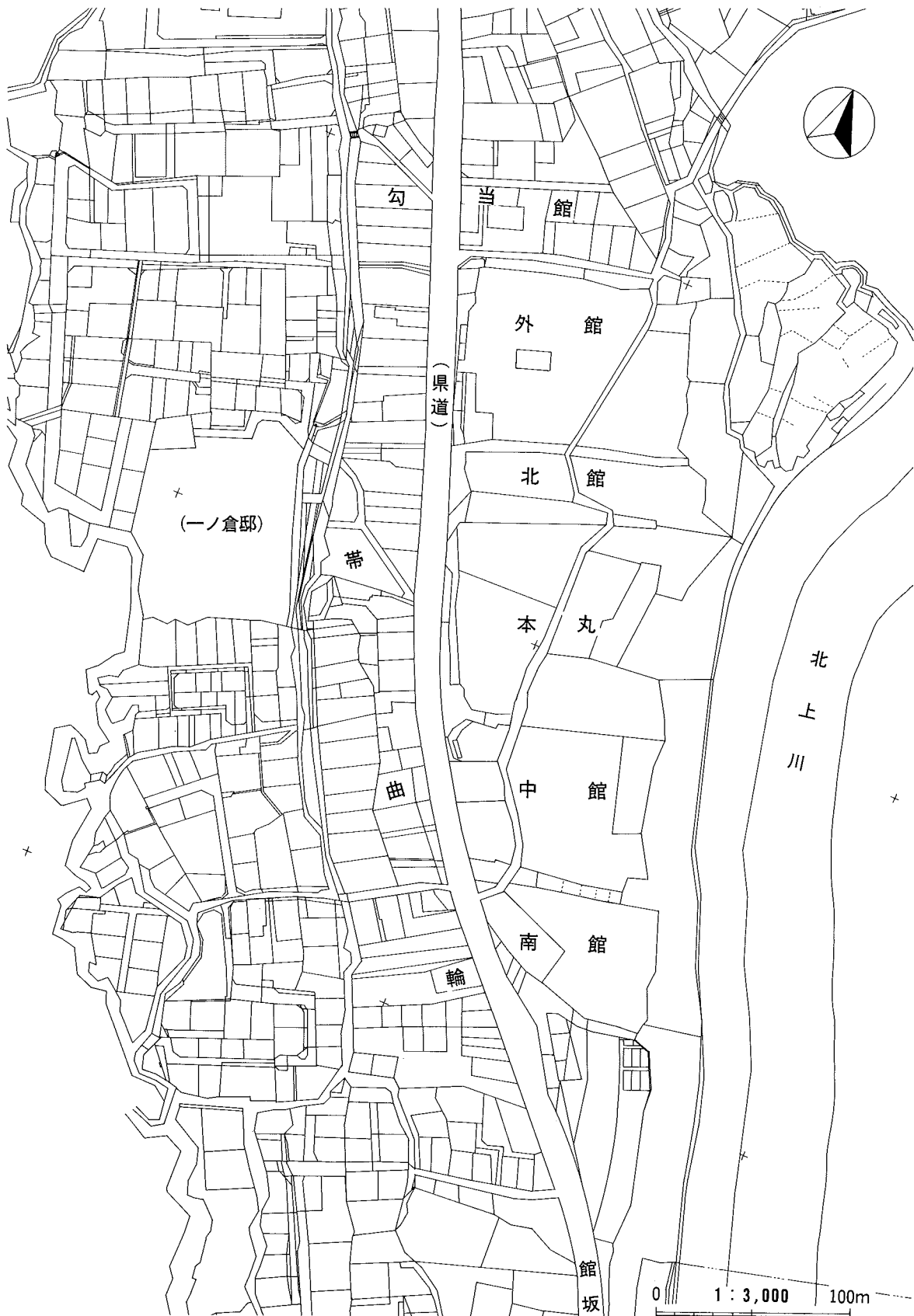
本 丸

本丸ではこれまでに西半部と南東部が調査されているが、北東部の厨川八幡宮境内から中心部のゲートボール場にかけては未調査である。遺構のうち掘立柱建物跡を構成する柱列や柱穴は、これまでの各調査区において多数確認されている。46 次・73 次調査区付近が最も密度が高く、北西部の 49 次調査、西部の 60 次調査西端部あたりは柱穴密度は薄い傾向にある。このうち 46 次・73 次調査区には、他の調査区に比較して大形の柱穴が多く、出土陶磁器も比較的多い。竪穴建物は昭和 43 年度の南東部保育園用地での調査で 7 棟検出されたほか、以後の調査でこれまでに 5 棟確認されている。地籍図から判読される道路は本丸を斜めに縦断するが、建物・竪穴の多くは、道路や道路に規制された地割りに方向をそろえている。73 次調査区の辺りは中心道路の西側の建物群の中でも、中心的な部分であろう。本丸自体での最も中心となる居館は、地形の要害性や全体配置から、未調査部分の厨川八幡宮から、ゲートボール場の周辺であろう。現在八幡宮社叢の南に、北上川にむけて開口する幅 2～3 m、深さ 80 cm ほどの溝が存在するが、あるいはこれが居館部分の囲郭施設になるものかもしれない。

本丸ではこれまでの発掘調査で瀬戸の窖窯Ⅳ期の卸し皿・瀬戸・美濃大窯Ⅰ期の灰釉皿、大窯Ⅱ期の鉄釉稜皿・鉄釉天目茶碗、大窯Ⅲ期～Ⅴ期の灰釉襷皿、大窯Ⅱ期の鉄釉大皿、16 世紀末葉の中国染付皿（E 群）・16 世紀の白磁皿、開元通寶・皇宗通寶・洪武通寶・永樂通寶が出土している。陶磁器は 15 世紀前半の可能性がある灰釉陷目皿も存在するが、主体となるのはおおむね 16 世紀中葉～後半の遺物である。本丸という名称が戦国期までさかのぼるか否か明確ではないが、曲輪の構造や検出遺構・遺物の内容を他の曲輪と比較しても、城館の主郭であること



第53図 安倍館遺跡縄張図



第54図 安倍館遺跡地籍図

安倍館遺跡（厨川城跡）

1400

瀬戸・美濃

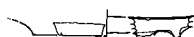


灰釉卸目皿

1500



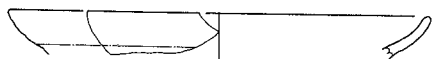
灰釉碗



灰釉丸皿

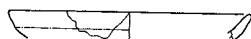


鉄釉大皿



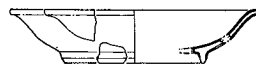
鉄釉天目茶碗

1600

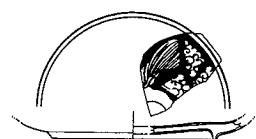
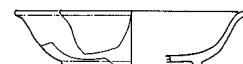


志野丸皿

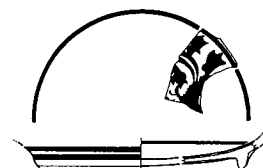
中国



白磁皿



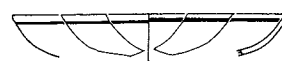
染付皿



1 (SD601・B層)
灰釉折縁皿



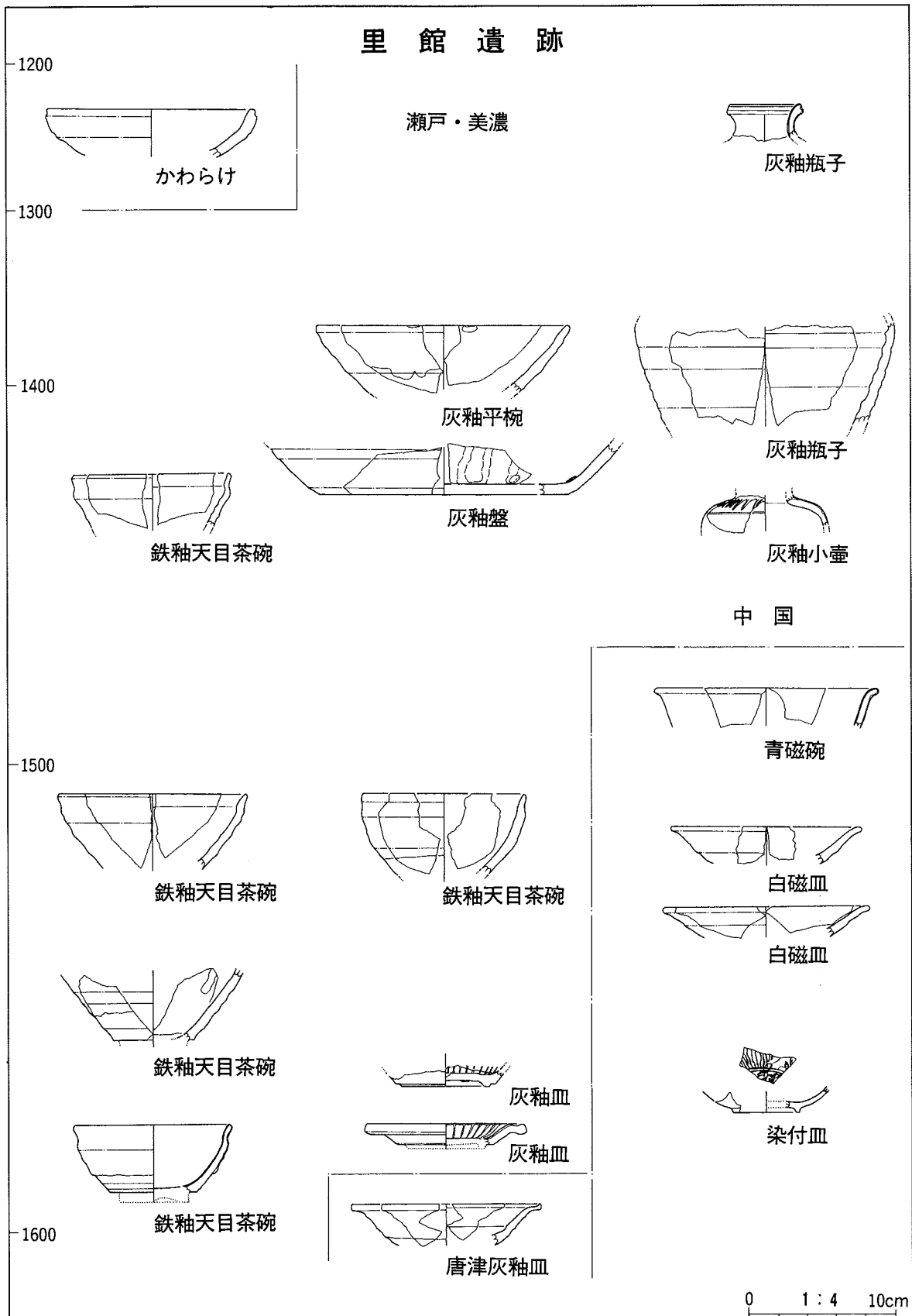
灰釉襷皿



染付皿

0 1 : 4 10cm

第55図 安倍館・里館遺跡出土の陶磁器(1)



第56図 安倍館・里館遺跡出土の陶磁器(2)

は疑いない。おそらく城主の居館を中心とした曲輪と考えられるが、城主の近親者や上級家臣の屋敷の存在も、今の段階では否定できない。中心道路の西側の竪穴からはフイゴの羽口破片が出土しており、小鍛冶などの生産活動も周辺でおこなわれていたと考えられる。

中館・南館

陶磁器

中館は本丸同様、掘立柱建物跡・竪穴建物跡が検出されているが、遺構密度、重複の状態は本丸よりも少ない。建物も本丸のものよりも小形のもが多く、柱穴の規模も本丸よりも小さい。城郭期の遺物には、第5次調査で出土した、瀬戸・美濃大窯Ⅲ期～Ⅳ期の灰釉折縁皿と、同じころの襷皿の小破片のみである。遺構内容はおおむね本丸に準じる内容であり、郭内にいくつもの屋敷が集合しているものと推定される。

南館は竪穴建物は明確なものは1棟も検出されていない。掘立柱建物も廂の付く建物と推定されるもの1棟、簡易な小屋のような建物1棟があり、ほかは明確なものは存在しない。南館も屋敷の存在は推定できるが、ほとんど重複がなく、遺物も出土しておらず、かなり短期間になりなされた曲輪であろう。

北館・外館

北館はこれまでのところ、城郭期の確実な建築遺構や遺物は全く検出されていない。おそらく本丸の北側がより高い土地になっているため、本丸を防御するためにもうけられた曲輪で、ふだん屋敷などはほとんど存在しなかったとおもわれる。

染付皿

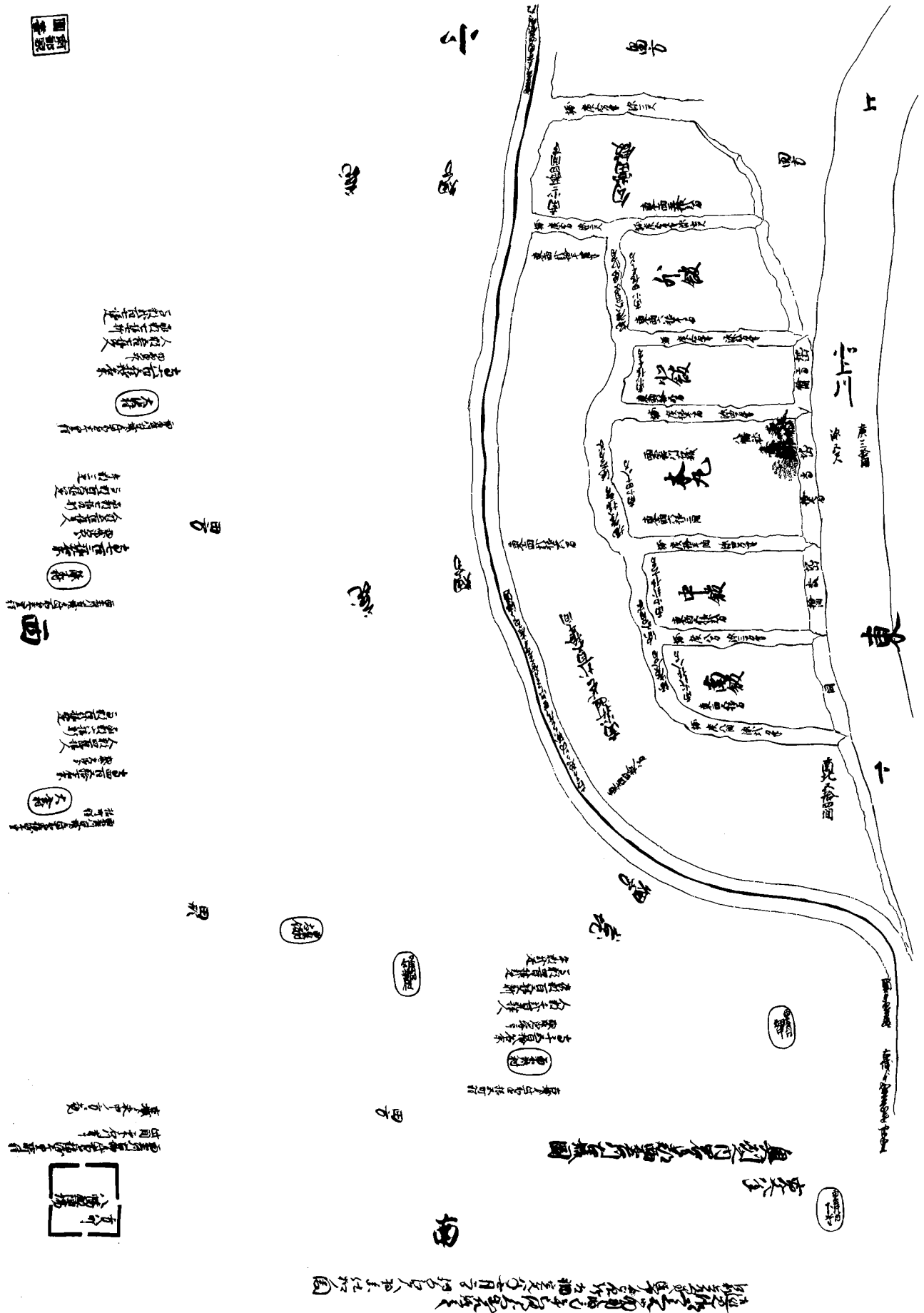
外館は平面規模は本丸に匹敵し、城内で最も高い土地に立地する。しかし、これまでのところ目立った建物などは確認されていない。遺物も中国の染付皿の小破片が1点出土しているに過ぎない。馬つなぎ場か、郭内の区画施設とおもわれる柱列が存在する。囲郭する堀も小規模で重複がないことから、本丸や中館などよりも相当後になってから付加された曲輪であろう。この中に家臣団の屋敷などは考えにくい。

勾當館・帯曲輪

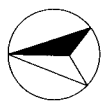
勾當館もいまのところほとんど遺構は検出されない。この外側（北側）は同一レベルで続く台地であり、外館以南の主郭部を防御するための曲輪であろう。

惣カハ

帯曲輪にはいままで数箇所直行し横断する溝が確認されている。地籍図では短冊型の字境が見られ、これに平行するような柱列や溝もある。この中から城郭の時期の遺物はいまのところ確認されていないが、帯曲輪の中に簡易な町屋のような建物が立ち並んでいた可能性はある。遺構の密度も薄く、他の曲輪との位置関係からみても、勾當館などとともに、最終段階に縄張りされた曲輪であろう。寛文8年奥州之内岩手郡栗谷川古城図に「古ハ惣カハの堀の由只今者盛岡より鹿角への海道」とあるように、この曲輪は「惣カハ」すなわち、中心部の5郭を守る総構的曲輪であった。



第57図 寛文八年奥州岩手郡之内栗谷川古城図 (1:5)



第58図 岩手郡・

「日本城跡図」刊行以来、古くは『日本城跡図』(1960.3、国土院教育委員会)を基本とし、その後確認された城館跡を加筆して作成した。全ての城館を実査して作成したのではなく、一部に位置等の不明確なものを含むが、今後の調査により修正・加筆していきたい。

志和郡の城館跡分布図

城館跡一覧表 盛岡市・岩手郡

No	城館・遺跡名(別称)	所在地	立地	比高	規模	主要郭	備考(城主・文献・年代等)
1	新城館	盛岡市繫字堂ヶ沢	段丘先端	60 m	80 m×40 m	1	綾織越前広信か？
2	上野館	繫字料内沢	尾根先端	60 m	80×40	1	
3	葎内館	同上	尾根先端	90 m	50×20	1	
4	館市館(古館)	繫字館市	尾根	90 m	400×100	3	手塚伊織・館市氏(館市家文書)
5	湯の館	繫字湯の館	山頂～山腹	180 m	400×350	2	田口氏？
6	繫III遺跡	繫字湯の館	段丘縁辺	20 m	100×80	1	湯の館の居館か？ 15世紀～16世紀
7	猪去八幡館	猪去字田面木	尾根先端	50 m	200×80	1	
8	猪去館	猪去字釈迦堂	段丘先端	10 m	350×200	3以上	猪去(斯波)氏 ～天正16年(1588)？
9	小和田館	猪去字小和田	台地先端	7 m	130×40	2	
10	太田館	上太田字館	微高地	1 m	200×150	2	太田氏(奥南盛風記) 天正ごろ
11	稻荷町(大館)	大館町・稻荷町	低位段丘	3 m	300×250	1	12世紀居館
12	里館	天昌寺町他	低位段丘	3 m	400×150	4～5	工藤氏 15世紀～16世紀
13	厨川城(安倍館遺跡)	安倍館町他	台地縁辺	20 m	650×200	7	工藤氏 16世紀 天正20年(1592)破却(破却書上)
14	上田城	上田？					所在地不明(遠野南部家文書：正平5年)
15	大森山遺跡	上田字黒石野	山頂	70 m	50×50	1	
16	淡路館(南館)	内丸	丘陵	18 m	450×250	3以上	不来方(福士)氏 近世盛岡城本丸～三の丸の位置(旧記)
17	慶善館(北館)	内丸	丘陵	？			福士氏 盛岡城外曲輪の位置(旧記)
18	佐々木館	下米内字寺並	丘陵	70 m	250×120	2	佐々木氏
19	大誘館	上米内字大誘	尾根先端	60 m	300×150	2	畝状堅堀群
20	野頭館	上米内字野頭	尾根	50 m	200×50	3	
21	米内館	上米内字畑井野	丘陵先端	25 m	150×150	2	
22	竹林遺跡	上米内字米内沢	丘陵先端	30 m	50×30	1	郭内に堅穴状の窪みが6カ所、古代末期環壕集落？
23	向館	上米内字米内沢	尾根先端	50 m	30×20	1	
24	矢沢館	上米内字畑	舌状台地	5 m	40×30	1	山間部の小規模な居館
25	大志田館	浅岸大志田(館沢)	尾根先端	160 m	400×100	1	
26	元信館	浅岸字元信	山頂	100 m	40×20	1	山間部の小規模城館、元信弥六
27	上村屋敷遺跡	浅岸字柿木平	段丘縁辺	3 m	60×40	1	浅岸氏？ 第19次・25次調査地点、16世紀、南に近世環壕屋敷
28	阿部館	浅岸字中津川	山頂	700 m			安倍氏
29	獅子ヶ鼻館(妙泉寺山)	加賀野字松山	丘陵	60 m	250×100	2	丘陵頂部を環壕が周回、近世寺院で部分的に改変。
30	花垣館(三上館)	天神町・住吉町	丘陵	20 m	350×150	2以上	盛岡築城のとき三上氏居住。
31	中野館	茶畑	丘陵	8 m	200×150	2以上	中野康実 天正14年
32	新山館	茶畑	低位段丘	4 m	150×100	1？	
33	葛西館	見石	丘陵先端	20 m	150×100	1？	葛西氏 慶長年間
34	安庭館	東安庭字館	丘陵先端	20 m	150×100	1	
35	蝶ヶ森館(まったつ)	盛岡市東安庭蝶ヶ森・真立	山頂	110 m	250×120	1	山頂に経塚、経ヶ森とも、単郭多重周壕。
36	榎木館(小山遺跡)	東山一丁目	台地	20 m	200×150	1	
37	仁反田館	東山二丁目	丘陵	30 m	280×100	4	仁反田四郎忠常(岩手郡誌)
38	川目C遺跡	川目第6地割	丘陵	30 m	200×80	1	堀切等はないが、斜面に段築。開元通寶・天目茶碗出土。
39	戸中館	川目字戸中	尾根先端	60 m	300×150	2	吉田氏か？多重堀切
40	内沢館	築川字内沢	尾根先端	80 m	80×50	1	
41	下館	築川	尾根先端	160 m	250×50	2	
42	平清館	築川平清	尾根先端	120 m	100×20	1	
43	細野館A	根田茂字細野	尾根先端	50 m	50×10	1	
44	細野館B	根田茂字細野	尾根先端	50 m	50×40	1	
45	マダテ	根田茂字築場	尾根先端	120 m	200×30		
46	天狗岩館	根田茂字天狗岩	尾根先端	120 m	150×50	1	
47	笹川館	砂子沢	尾根先端	100 m	60×20	1	
48	若宮館	砂子沢字横石	尾根先端	40 m	60×20	1	
49	砂子沢館	砂子沢字御蔵	尾根先端	20 m	50×50	1	
50	手代森館	手代森字館	山麓台地	50 m	250×150	1	手代森秀親(紫波郡誌)
51	黒川館	黒川字沢田	丘陵先端	30 m	150×100	1	黒川某(紫波郡誌)
52	高陣	黒川字高陣山	丘陵頂部	90 m			
53	大ヶ生館(北館・南館)	大ヶ生字城内	丘陵先端	40 m	300×100	2	大ヶ生玄蕃(祐清私記)
54	上大ヶ生館	上大ヶ生	山頂	170 m	80×30	1	
55	江柄館	大ヶ生江柄	山頂	170 m	200×150	1	
56	乙部館(乙部城)	乙部字館	舌状台地	10 m	400×150	5	乙部兵庫→福士右衛門、天正20年
57	乙部方八丁遺跡	乙部字新田	段丘縁辺	20 m	400×250	2	
58	見前館(見前城)	西見前字館	微高地	1 m	250×200	2	見前若狹→日戸内膳、天正20年存置
59	見前古館	東見前字古館	低位段丘	2 m	300×270		見前館以前の館？
60	永井館	永井字前田	平地				永井八郎延明 永井小学校の地
61	向中野北館	飯岡新田字才川	微高地	1 m	80×70	1	東野文七(志和軍戦記)
62	向中野南館	飯岡新田字才川	低位段丘	2 m	70×60	1	東野氏
63	大館	湯沢字館	段丘先端	5 m	200×90	1	杉山一学(志和軍戦記)、二重堀
64	羽場館(小館)	羽場字百目木	段丘先端	6 m	150×100	3	岩倉常太郎(志和軍戦記)
65	飯岡館	上飯岡字赤坂	山麓丘陵	70 m	200×200	3	飯岡平九郎・弥六郎祐實
66	寺館	上飯岡字館野前	微高地	1 m	250×80	2	飯岡氏？
67	月見山	上飯岡字山中	小丘陵	10 m	180×50	1	
68	湯ノ沢館	雫石町長山字有根	丘陵				
69	有根館	長山字有根	丘陵		70×50		

No.	城館・遺跡名(別称)	所在地	立地	比高	規模	主要郭	備考(城主・文献・年代等)
70	篠盛館	磐石町長山字館	丘陵				
71	的館	長山篠ヶ森	丘陵				
72	長山館(岩井花館)	長山字狼沢	丘陵		60×30		
73	土樋館	長山字中上	山頂		30×25		
74	柿木館	長山字柿木	平地				
75	上和野館	上野字上和野	丘陵				
76	和野館(曾利館)	上野字曾利	平地				
77	天神館	上野字天神	平地				
78	新里館	上野字片子	平地				
79	中の館(中野館)	御明神字清水川	山麓		150×60		
80	大館	御明神字山津田	山頂		500×250	4以上	
81	高見館	御明神字滝沢	山麓				
82	小沢沢館	橋場字明神下	山麓		90×130		北浦五郎重任(岩手郡誌)
83	北浦館	万田渡	平地				
84	源太堂館	八卦麻見田	平地				
85	磐石城(八幡館)	下町	段丘	10 m	600×200	5以上	戸沢氏→磐石(斯波)氏→南部氏
86	古館	古館	段丘	10 m			
87	矢川館	西安庭字矢川野	山頂				
88	戸沢館	西安庭字戸沢	段丘				戸沢氏(磐石町史)
89	田屋館	西安庭字下戸沢	段丘先端	20 m	100×90	2	
90	橋沢館(野曾木館)	西安庭字除	平地				
91	矢櫃館(安倍館)	西安庭字栃ヶ沢	尾根先端	30 m	150×50	1	多重堀切
92	大村館	南畑 字上台	山麓				
93	御所	元御所	平地				
94	八幡館	滝沢村大釜字白山	山頂	80 m	250×200	1	主郭は径 50 m程
95		大釜字白山	山頂	160 m	120×30	1	
96	千ヶ窪遺跡	大釜字千ヶ窪	山頂	110 m	150×60	1	竪穴状の窪みが約 30 箇所
97	大釜館	大釜字外館	微高地	1 m	200×100	2以上	
98	篠木館	篠木字上篠木	丘陵	20 m	150×100	1	
99	エゾ館	篠木字中村	台地	8 m	200×80	3	先端より一の台・二の台・三の台(消滅)と呼称
100	大沢館	大沢字館	丘陵先端	30 m	100×60		
101	参郷森	篠木字参郷森	独立丘陵	20 m	150×70		明確な遺構なし
102	御飯屋館(鵜飼館)	鵜飼字御庭田	独立丘陵	30 m			明確な遺構なし。江戸時代東の麓に御飯屋が存在。鵜飼(福士)氏
103	勘助館	滝沢	舌状台地	10 m			
104	館	湯舟沢	丘陵	10 m			
105	一本木館	一本木	台地縁辺	10 m	90×90	1	
106	稲荷山館	西根町平館字蟹沢	山頂		170×170		
107	平館城	平館	丘陵先端		400×200m	1	平館氏
108	平館城(館山)	平館字館山	山頂		80×80	1	
109	堀切城	平館字堀切	丘陵		140×100	1	堀切氏
110	寺田城	寺田字八幡	丘陵		200×140	1	北氏・工藤氏・帷子氏
111	下斗内館	寺田字斗内	丘陵先端		90×60	1	
112	田頭城	田頭字館越	独立丘陵	30 m	300×130	2	工藤直祐
113	新井館	田頭字平笠	段丘				
114	赤間館	帷子字川原目	丘陵		160×90		
115	荒木田城	荒木田	丘陵	20 m	230×120		
116	間館	間館	丘陵				
117	暮坪遺跡(蝦夷森)	寺田暮坪	山頂	80 m	1		平安時代開郭集落
118	子飼沢山遺跡	子飼沢山	山頂	100 m	1		〃 開郭集落
119	山の神遺跡	山の神	山頂				〃 開郭集落
120	蝦夷館	渋川	台地先端	20 m	40×15	1	高地性集落
121	三森山遺跡		山頂				
122	小屋の沢遺跡	松尾村松尾小屋の沢	山頂				
123	北館(下河館)	松尾中松尾	丘陵				
124	佐々木館(左京館・柵館)	野駄谷地中	山頂			佐々木左京	
125	野駄館	野駄字館	山頂				
126	田中館	野駄野駄	丘陵				
127	寄木館	野駄字大沼	山頂				
128	蝦夷館	寄木畑	独立丘陵				
129	沼崎館	岩手町川口幅の上	段丘先端	10 m	150×70	1	11世紀の土器群
130	川口城	川口幅の上	段丘先端	20 m	150×80		
131	一方井城(新館)	一方井 13 地割輪	丘陵先端	20 m	350×100	3	一方井氏
132	一方井城(古館)	一方井 15 地割	丘陵先端	30 m	170×100	2	一方井氏
133	黒内館	黒内 4 地割	丘陵	20 m	100×60	2	
134	沼宮内城(青山城・民部館)	沼宮内 11 地割城山	丘陵先端	m	300×180	3	
135	尾呂部館	沼宮内 23 地割	台地縁辺		50×50	1	
136	子抱館	子抱 6 地割	山頂				
137	落合館	子抱 9 地割	台地縁辺		180×110	2	
138	横田館(エゾ館)	久保字横田	丘陵先端		200×120	2	
139	江刈内館	江刈内 15 地割	丘陵		100×60		
140	大坊館	江刈内 19 地割	丘陵		140×140		
141	太布蝦夷森遺跡	南山形太布	山頂		40×20	1	
142	泥這館(エゾ館)	葛巻町江刈字泥這	尾根先端			1	
143	本木館	江刈字本木	段丘		70×50	1	

No.	城館・遺跡名(別称)	所在地	立地	比高	規模	主要郭	備考(城主・文献・年代等)
144	西里館	江刈字西里	丘陵		50×100		
145	車門館	江刈字車門	山城		150×150		
146	山王館	江刈字滝沢	段丘		40×40	1	建武元年南朝方によって落城
147	栗山向館	江刈字栗山	山頂				
148	泉田向館	江刈字泉田	山頂				
149	暮坪館	葛巻町江刈字小苗代	丘陵先端		500		横溝氏
150	宗光館(江刈城)	江刈字寺田	丘陵先端		60×40	1	建武元年横溝頼重に安堵(伝)
151	戸花館	江刈字大沢真下	丘陵		160×95		
152	真下館(大沢館)	江刈字大沢真下	丘陵		180×90	2	
153	鳩岡館	江刈字打田内	丘陵		150×80		斜面に竪穴
154	高家領館(エゾモリ)	江刈字高家領	山頂		60×55	1?	
155	上平館	茶屋場字元町	山麓				
156	元町館	茶屋場字元町	丘陵		200×100	1	工藤将監(北朝)建武元年に没落(伝)
157	葛巻城	城内小路	山頂		200×200	3	葛巻氏
158	上野沢館(和野沢館)	田代字赤石野	丘陵	60	330×260		
159	猿方館	古川戸字猿方	山頂				
160	小田館	小田字後	山麓		200×150	2	
161	扇ノ沢館	小田字後	山頂		20×70		
162	昼沢館	小屋瀬字昼沢	尾根先端	30	50×100	1	放射状の竪堀群
163	大石館	小屋瀬字大石	丘陵		70×30		
164	小屋瀬館	小屋瀬字大石	山頂		100×50	1	鈴木氏
165	荒谷館	小屋瀬字荒谷	尾根先端		30×40		
166	星野館	星野字サドア沢口	山麓		190×160		
167	寺畑館	田部字寺畑	丘陵		120×90		建武元年落城、横溝祐定(南朝)に安堵(伝)
168	冬部館	市部内	山頂		150×100	1	竪穴、建武元年南朝方によって落城(伝)、天正年間冬部氏居住。
169	田屋館	田屋	丘陵先端		120×80		
170	宇別東館	宇別	丘陵				
171	桃木館	桃木	丘陵		100×50		
172	中沢館	中沢	丘陵		100×100		
173	玉山館	玉山村玉山城内字館	丘陵先端		200×150	2	玉山(川村)氏
174	二子沢館	玉山二子沢	丘陵先端		200×120	2	玉山大和
175	館花館	玉山館花	台地先端	10 m	160×40	2	
176	日戸館	日戸字古屋敷	丘陵先端	30 m	250×100	3	日戸氏
177	祝の沢館	日戸字祝沢	平地		100×200		
178	川口平館(もぐら館)	川又字赤坂	丘陵先端	20 m	100×80	1	
179	町川又館	川又字赤坂	尾根先端	50 m	150×60	2	
180	館	川又字中館	丘陵				
181	堀館	川又字中館	山麓		100×100	1	山際に堀
182	平田野館(下くらの館)	洪民字大前田	段丘先端	8 m	60×40	1	
183	御供山館	洪民字岩鼻	丘陵先端	20 m	80×50	2	
184	洪民館	洪民	段丘縁辺	20 m	80×80	1	
185	愛宕山館(城山)	洪民字愛宕	丘陵先端	50 m	50×30		
186	山屋館	洪民字岩の沢	山麓		100×300		
187	屋敷森	川崎字川崎	丘陵	20 m	100×36		
188	八幡館(判官堂)	芋田字上武道	段丘先端	20 m	60×30	1	
189	門前寺館	門前寺字館	丘陵先端	20 m	80×80	1	
190	下田城	下田字生出袋	段丘先端	30 m	200×100	2	下田氏
191	ふん館(八幡館)	下田字牡丹野	段丘先端	30 m	200×100	3	
192	矢城館	川崎字向川原	段丘		130×300		
193	松内館	松内字松内	尾根先端		70×50		
194	館	松内字館					
195	中塚館	好摩字中塚				3	?
196	枅沢山館	馬場字状小屋	丘陵頂部	30 m	50×25	1	
197	葛巻館	馬場字田茂内	丘陵		40×15		
198	小館	馬場字滝の沢	尾根			2	
199	前田蝦夷館	馬場字赤坂	山麓				
200	二子館	馬場字太子堂		50 m	1		
201	熊堂蝦夷館	巻堀字中道	段丘縁辺	8 m	50×50	1	
202	西郡館	巻堀字西郡	丘陵		90×90		
203	桑畑館	巻堀字桑畑	丘陵		100×100	1	
204	段の平館	永井	丘陵先端				
205	小谷崎館	永井字永井沢	丘陵先端	30 m	90×60	1	
206	肝入屋敷	藪川字肝入屋敷	丘陵	40 m	20×10		
207	向井沢堀米館	藪川字向井沢	山麓		60×50	1	
208	軽米沢堀米館	藪川字軽井沢	山麓		30×30	1	
209	蒲田館	藪川字堀米頭	山頂	200 m	140×90	2	

城館跡一覧表 紫波郡

No	城館・遺跡名(別称)	所在地	立地	比高	規模	主要郭	備考(城主・文献・年代等)
210	座頭館	矢巾町広宮沢	台地縁辺	20 m	20 m×10 m	1	
211	谷地館(太田館)	太田字谷地館	平地				太田氏
212	煙山館	煙山	尾根先端	60 m	100×80		煙山氏
213	いたこ館	煙山字轟ヶ平					
214	室岡館(久保屋敷)	室岡字久保	平地		80×60	2	
215	伝法寺館	北伝法寺字館前	丘陵先端	30 m	100×80	2	
216	岩清水館	岩清水字城内	尾根先端	50 m	150×80		岩清水右京 高田吉兵衛
217	高田館(吉兵衛館)	高田字北田	平地				
218	徳田館	西徳田字五百刈田					
219	白沢館	白沢	独立丘陵	20 m	180×60	1	白沢氏
220	山館	紫波町上松本字内分	尾根頂部	510	80×100	1	単郭を基調、郭内は自然地形を残す。
221	松本館	下松本字下二合	平地	1	100×100		松本清兵衛
222	山王海館	土館字小清	山麓台地	30	180×180	2	山王海太郎(天正～慶長)
223	弥勒地館	土館字弥勒	丘陵先端	100	100×80	1	
224	寺館(源勝寺館)	土館字閑沢	丘陵	70	200×250		享徳3年(1454)～
225	笹森館	土館字笹森	尾根先端	50	250×250		
226	笹木館	土館字田面	山麓丘陵	40	150×150	1	
227	金田館	土館字金田	山麓台地	10	110×150	1	
228	浦田館	土館字浦田	台地	20	120×100	1	
229	愛宕山館	土館字和山	山麓丘陵	30	120×80	1	
230	片寄城(吉兵衛館・今崎城)	片寄字中平	山麓丘陵	60	400×250	3	
231	墳館(古館・漆館)	片寄字漆立	山麓丘陵	40	200×150	1	
232	上久保館	片寄字上久保	台地	2	120×100		
233	的場館	赤沢字的場	丘陵				
234	船久保館	赤沢字船久保	丘陵	40	180×100	1	
235	白山館 I	赤沢	山頂			1	
236	白山館 II	赤沢	尾根			1	
237	田村館	赤沢字清水袋	丘陵	25	150×150		
238	加賀館	赤沢字加賀館	丘陵	27	250×300		
239	赤沢館	赤沢字赤沢	山頂	90	200×150	1	
240	古館	大巻字上山	山麓台地				
241	大巻館(河村館)	大巻字花館	山頂	60	350×250	3	大巻氏
242	梅ノ木館	大巻字梅ノ木	平地				
243	赤川館	大巻字長沢尻	平地				葛原伯耆(文亀2年堂宇建立)・葛原義敬(斯波御所次男)
244	谷地館	宮手字谷地館	平地		100×120	1	
245	陣ヶ丘	宮手字陣ヶ丘	丘陵	13	300×280		
246	泉館	宮手字泉屋敷	平地	2	120×90	1	
247	久々館	紫波町宮手字久々館	台地	1 m	80 m×80 m	1	
248	戸部御所(西御所)	二日町字南七久保	丘陵	10	150×100	1	斯波家政(～天正16年)
249	吉兵衛館	二日町字向山	丘陵	25	500×200	2	高田吉兵衛
250	高水寺城(郡山城)	二日町字古館	丘陵	90	700×500	4	以上斯波氏
251	比爪館	南日詰字箱清水	微高地	2	300×300	1	樋爪氏
252	善知鳥館(坂本館)	南日詰字滝名川	段丘陵縁辺	6	150×100	1	
253	平沢館	平沢字館	平地	0	200×150		築田大学
254	太郎館	平沢字的場	平地				
255	古館	佐比内字古館	丘陵			1	
256	佐比内館	佐比内字神田	丘陵	45	250×200	1	河村秀清
257	牛の頭館	佐比内字牛の頭	丘陵				
258	平栗館	佐比内字平栗	丘陵				
259	星川館	北田字星川	丘陵				
260	北田館	北田	丘陵		30×30	2	円形の単郭
261	梅ノ木館(畑沢館)	北田字畑沢	山頂				
262	稲藤館(フクベ館)	稲藤字田屋	微高地	2	210×120	1	稲藤大炊
263	犬吠森館(東館)	犬吠森字沼端	丘陵	35	200×180	2	東民部
264	江柄館	江柄字大志田	丘陵	25	100×50	1	江柄式部(天正年間)
265	高間館(西野館)	遠山字西野々	山頂				
266	遠山館	遠山字新田	山頂				遠山氏(慶長年間)
267	栃内館	栃内字栃内	段丘陵縁辺	10	100×120	1	栃内源蔵(天正年間)
268	中島城	中島字上長根	微高地	2			中島安将(天正年間)
269	長岡館	東長岡字館	丘陵	33	350×200	2	長岡八右衛門・南部直重(～慶長5年)
270	西田館	犬測字西田	丘陵先端	12	150×100	1	
271	機織館(彦部館)	彦部字機織	丘陵	35	250×200	1	彦部氏(天正年間)
272	北条館	北日詰字城内	段丘陵縁辺	6	180×250	1	北条氏・日詰氏(天正年間)
273	星山館	星山字間野村	平地	3	100×100		星山左馬丞
274	山屋館	山屋	山頂	40	60×80	1	

(3) 城館の年代と性格

安倍館遺跡から出土した陶磁器類は、非常に少量ながら概ね 16 世紀代におさまる時期の製品が主体である。文治 5 年（1189）に岩手郡を拝領し、鎌倉時代より当地にあった工藤氏の厨川館とするには、城館の実年代はかなり新しい。

里館遺跡

安倍館遺跡から南西方向約 1 km に存在する里館遺跡は、これまでの調査で、城館としての年代が 15 世紀前半にさかのぼることが明らかである。そしてその終末は安倍館遺跡と同じ 16 世紀の末葉ごろである。安倍館遺跡の瀬戸・美濃の窖窯期の製品はⅣ期の灰釉卸目皿 1 点のみで、ほとんどが大窯期の製品に限られる。これに対し、里館遺跡では窖窯Ⅱ期の灰釉瓶子のほか、12～13 世紀の手づくねかわらけや、窖窯Ⅳ期の灰釉平碗・盤・小壺、常滑・越前の甕、東北地方産の焼締めの摺鉢、中国の青磁碗など、14～15 世紀の遺物が遺構から出土している。この遺跡の西よりの地点では、12 世紀後半から 13 世紀の常滑の壺やかわらけを出土した屋敷の遺構がある（第 34 次調査）。この 12 世紀後半から 13 世紀の遺構については、まだ全体像が不明確で、鎌倉時代の工藤氏の厨川館に比定するには、いましばらくの間慎重でなくてはならない。しかし、遅くとも 15 世紀段階では、遺跡の東部に堀や掘立柱建物群が存在しており、安倍館遺跡よりも先行して構築された城館であることが明確である。里館遺跡は 15 世紀前半には成立していた工藤氏の厨川館であり、16 世紀には厨川城（安倍館遺跡）と併存していた。そして双方の城館は、それぞれかなり近い時期に終末を迎えたと考えられる。

厨川館

では、安倍館遺跡はどのような性格の城館なのだろうか。この城館は当初は本丸部分だけであったものが順次規模を上げ、最終的に 7 郭を擁する岩手郡最大級の城館となった。寛文 8 年（1668）段階でも「栗谷川古城」と伝えられ、城館の主要な活動期が 16 世紀代と考えられることから、天正 20 年の城割で破却された工藤兵部少輔の持城厨川城に最もふさわしい城館である。厨川城はそれ以前からの厨川館とは別に、15 世紀の末か 16 世紀初めごろ以後、何らかの政治的あるいは軍事的要請のもとに築城された新城と考えられる。城内には主要な 4 郭を貫通する南北道路が存在し、のちに鹿角街道が城域の西辺や帯曲輪を通過している。こうした陸上交通路のほか、北上川を眼下にする立地は、川の舟運をも扼す構えである。厨川城（安倍館遺跡）は北上川沿いの水陸の交通を掌握し、岩手郡中央部の拠点として機能した城館であった。

厨川城

(4) 拠点城館の整備

岩手郡のなかでは、雫石盆地の中央部にある雫石城が、規模・構造的に厨川城と比肩する存在である。郡域の厨川以北では、日戸館・玉山館・下田城（玉山村）・川口城・沼宮内城・一方井城（岩手町）・田頭城（西根町）・葛巻城（葛巻町）など、主要郭が 2～3 郭程度で構成される中規模の城館（準拠点城館）が、概ね地域毎にバランス良く分布している。そしてその周囲には、単郭構造の縄張の中小の城館（一般城館）や、小規模城館が多く存在する。こうした城館の分布状況から、戦国期の岩手郡は、各村落や集落の土豪たちが地域を代表する村落領主のもとに統括される社会が想定され、さらに各地域をまとめるように、郡中央部（現在の盛岡周辺）の厨川城、郡西部（雫石盆地）の雫石城が、ある時期に大幅に拡大整備され、岩手郡の 2 大拠

点城館となったと推定される。安倍館遺跡の北館・外館・勾當館や南館・帯曲輪等の遺構密度は非常に希薄であり、城域の拡大から廃城に至るまでの期間が極めて短かったことを示す。城館の最終的な縄張りの成立が、天正 20 年 (1591) の破却からさほど遡らないとすれば、その整備は天正 14 年～16 年 (1586～1588) の、三戸南部氏の岩手郡雫石と志和郡への進攻のころであろうか。あるいは天文 9 年の南部晴政の雫石進攻とまもなく起こった斯波氏の岩手郡進攻のころの可能性もある。しかし天文期の場合は廃城までに約半世紀の期間があり、遺構密度や重複状況の観点から肯定しがたい。やはり天正 14～16 年の南部信直の雫石・志和郡進攻の時期かそれ以後の可能性が高いと考えられる。雫石城は天正 14 年以前までは雫石斯波氏の居城であったが、天正 14 年の三戸南部氏の攻略後は、南部信直の直轄域となっていたらしく、天正 20 年の破却の前は、信直の代官八日町太郎兵衛が在城した。²⁾ 雫石城も段丘上に 5 郭以上並列する広大な縄張りで規模・構造とも厨川城と類似する。厨川城と雫石城の拡大整備が同じ頃の実施とすれば、それは南部信直による志和郡進攻や、岩手郡支配の再編との関連で捉えるべき問題であろう。

2. 縄文時代早期の遺物包含層

第 66 次外館の調査の東側平坦部で縄文時代早期の遺物包含層を検出した。安倍館遺跡でのこれまでの調査で早期の遺構と遺物を検出した例は、第 6 次調査中館で早期中葉の遺物包含層を確認し、第 8 次調査帯曲輪南部で無文の深鉢 1 点が出土したのに続き 3 例目である。なお、第 7 次調査外館西辺で草創期の爪形文土器片 1 点が出土している。³⁾

過去の検出例

第 66 次調査で検出した遺物包含層から出土した遺物は早期の土器のほか、前期初頭と中期及び弥生時代終末期の土器がある。その中で多量に出土した早期の土器群についてみる。破片のみで器形は不明ではあるが、文様観察では次の特徴が認められる。

早期の土器

- ① 沈線あるいは先端が尖った工具による押引文に貝殻腹縁文を沿わせている。
- ② 沈線あるいは先端が尖った工具による押引文で構成された区画帯を貝殻腹縁文で充填している。
- ③ 沈線による文様の屈曲点に刺突が施されるものがある。

以上の諸特徴から出土した土器は早期中葉にあたる貝殻沈線文系の物見台式土器の様相に類似する。また、物見台式土器は中館の第 6 次調査でも出土している。

このほか無文土器の体部が 1 点出土しているが、内外面に指頭圧痕が認められる点などが早期前葉の土器の特徴を備えており、過去の第 8 次帯曲輪の調査で出土した深鉢と同様のものである。

安倍館遺跡から出土した早期の土器群の分布範囲については今後の調査による資料の追加に期待したい。